

読者への約束手形 / スティーブン・ミンチ

アスカニオ……その名を正確に発音するときは、歯擦音を発したり、息をそっと吐き出したりしなければならぬわけだから、「アスカニオ」と口に出して言う場合は、まさに囁くがごとく発声せざるを得ないところがあります。実際、「アスカニオ」という名前は密かに語られるべく数々の秘密に通じているのです。アスカニオ。その名はスペインのマジシャンにはごく身近で、親しみと敬愛の念を抱かせるものです。それはちょうどアメリカのマジシャンにとってのパーロン、日本のマジシャンにとっての天海、オランダのマジシャンにとってのカプスのような存在なのです。しかし同時に、英語圏のマジシャンにとって、アスカニオという名前を聞くと、アスカニオが残した計り知れないほど精緻に構築された哲学的思索と、美しくも精密に磨き上げられた科学的体系と、心を揺さぶる詩情に満ちた文学的表現とに思いを馳せずにはいられません。そのような中でアスカニオという名前は、芳しい香気を放ち始め、人の心の中に確固たる信頼感を醸造していったでしょう。ここ数十年、英語圏のマジシャンの間でも、この偉大なるアルトゥーロ・デ・アスカニオについて多くが語られるようになり、特にスペインのカード・マジックに多大なる影響を及ぼしてきたことは周知の事実となっています。ところが一方でこの巨匠の足跡となると、英語圏のマジシャンにはその一握りしか紹介されていないのが実情です……具体的に言えば、小冊子ながら素晴らしい内容の研究書が2冊あるばかりです。そのうちの1冊はパームに関するもので、もう1冊はダブルになっているカードの扱い方に関するものです。また、タマリッツやジョビーやペナタールといった、アスカニオの優秀な弟子たちによって述べ伝えられるアスカニオの教えからも、その業績が垣間見えます。それからもちろん、近年ヨーロッパで生まれている数々の優秀なクロスアップ・マジシャンたちも、アスカニオの偉業のなせる技と言えます。なぜならこういったマジシャンたちはアスカニオの体温が感じられる環境の元で育まれていったわけですから。

私自身について言えば、アスカニオその人との交流はごくわずかしかりません。手紙のやりとりを少ししたこと、2度ほど短時間ではありますが実際にお目にかかったこと

くらいです。1度目はマドリッドで。2度目はお亡くなりになるわずか数ヶ月前にラスベガスでお目にかかりました。でもこの人物がマジックに対して抱いている果てしないほどの愛情と熱情を私がハッキリ理解するには、それだけの交流で十分だったと思っています。アスカニオがマジックについて語るのを聞くにつけ、アスカニオがカードを扱っているさまを見るにつけ、私にはアスカニオが、ただただ底知れぬ知性とあふれんばかりの愛情をもって、何か絶対的な美とでもいうようなものに傾倒している者のように感じて取れたのです。実際、アスカニオがマジックの真価を捉え、これを愛しているということは、そのままざしを見れば明らかだし、その手の動き1つをとってみても、そのような愛がにじみ出ているように思われたのです。アスカニオとじかに接することで、こうした感動に満ちた体験、多くのことに気づかせてもらえる体験をすることが出来たのです。

でもこの場に及んでも、私たちスペイン語が読めないかわいそうな者たちは、アスカニオと呼ばれるこの歴史的人物について、間接的かつ断片的にしか知る由もないなんて。いや、そんなことはもうないのです！ヘスス・エチェベリ氏、ラファエル・ペナタール氏、ラウラ・アビレス氏……順に、編者、英訳者、出版者です……の尽力により、私たちの積年の願いがついに現実のものとなるのです。すなわち私たちは今やアスカニオをじかに学ぶことが出来るようになった、そしてその精緻で華麗な思索から多くのものを得ることが出来るようになった、ということです。この思索には、アスカニオが折に触れて発見した事柄、あるいは折に触れて考案した事柄、そして常々身を以て示し続けてきた事柄が含まれています。そして、こういった事柄を学んでいけば、私たちは必ずやカード・マジックというものを B.A. 時代（アスカニオの出現以前の時代*2）よりもなんらかの形でよいものにしていくことが出来るものと思います。読者の皆さんも、この点に関しては、私と同じように期待で胸をふくらませていらっしやることでしょ。うでなければこの本を手にとっていらっしやるはずがありませんからね。さあ私はもう待ちきれません。読者の皆さんもそうでしょう。ではページをめくって、本文を読んでもらうことと致しましょう……

スティーブン・ミンチ 2004年、シアトルにて。